『比較論理学研究』第2号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書(2004)

アリストテレスにおける推論の必然性とアポリアー
—予備的考察—

赤井　清晃

1．はじめに

本稿は，アリストテレスが『分析論』において，推論の結論命題が，「必然的に帰結する」ἐξ ἀνάγκης συμβαίνει (Arist. *A.Pr.*, 24b19-20)というとき，その「必然的に」ということがどういう意味で言われているのかを明らかにすることと同時に，論証（アポデイクシス），問答法（ディアレクティケー）と並んで，特に，難問（アポリアー）の方法との関係を探るための予備的考察である。アリストテレス解釈としての考察の対象は，アリストテレスのテクストに始まり，アリストテレスのテクストに終わるはずであるが，本稿では，前半は，後世のアリストテレス解釈のいくつかと，「推論の必然性」および「推論をめぐる必然性」について，問題そのものを考察した文献のいくつかを取り上げて，特に，「推論をめぐる必然性」について，問題点を指摘した後，後半は，アポリアーの方法について言及することによって，今後の研究に資することを目的とする。

まず，「推論の必然性」というとき，その必然性は，推論を構成する前提命題と結論命題の論理的関係としての必然性と理解されるであろう。例えば，ポール・ロワイヤルの論理学では，次のように定義されている[1]。

> La necessité du raisonnement n'est fondée que sur les bornes étroites de l'esprit humain, qui ayant à juger de la verité ou de la fausseté d'une proposition, qu'alors on appelle *question*, ne le peut pas toûjours faire par la considération des deux idées qui la composent, dont celle qui en est le sujet est aussi appellée *le petit terme* parceque le sujet est d'ordinaire moins étendu que l'attribut, et celle qui en est l'attribut est aussi appellée *le grand terme* par une raison contraire.

ここで，問題となるのは，「推論の必然性が，人間の精神にのみ基づいている」ということの意味である。すなわち，「推論の必然性」とは，推論を行なう人間の精神の側にある必然性であると主張しているのか，それとも，人間の精神が推論するのは，人間の精神の側にある必然性によってではなくて，推論を構成する諸命題によって表現されている事柄自体に何らかの必然性があって，人間の精神は，その必然性に従って推論を行なっているだけであると主張しているのか，ということである。アルノーとニコールの場合は，人間の精神の側に，一定の必然性，換言すれば，思考の法則を前提しているように思われる。このような前提は，近現代の人々が，無意識的に前提して，アリストテレスのテクストに向かうとき，テクストを読み解き損ねる危険があると言わなければならない。しかし，必然性そのものについて言えば，心理主義とも決別し，自然主義的態度にも批判を加えて，純粋論理学を提唱しつつあった，『論理学研究』のフッサールも，ミルを引用して，言語を思考の手段として，論理学がその必然性を考察することは認めている[2]。

> Die Notwendigkeit, die Logik mit sprachlichen Erörterungen zu beginnen, ist vom Standpunkte der logischen Kunstlehre oft anerkannt worden. „Die Sprache" – so lesen wir bei Mill – „ist ausgescheintlich eines der vornehmsten Hilfsmittel und Werkzeuge des Denkens."

[1] Arnauld et Nicole, *La logique*, p.178.

[2] Husserl, XIX/1, I. Teil, Einleitung, §1, A3/$B_1$1.

フッサール自身は，純粋論理学と相関的な意識の体験を志向性として捉えて，その普遍的構造形式を現象学的に解明しようとしたわけであるが，我々の問題とする必然性も，簡単にその根拠を決定することができないものである。前もって注意しておくと，ソラブジが言うように，アリストテレスの原因論と推論をめぐる必然性を関連させて解釈することには，慎重でなければならない[3]。

> Aristotle thinks of cause in terms of explanation, and this may well be fruitful. But the modern tendency has been to relate cause and explanation to necessity and laws, and necessity and laws to each other. The Greeks did not at first regard these relations as self-evident; and Aristotle, though recognising some such links, makes his account more nuanced – rightly, I believe – than many modern ones. It was the Stoics who first connected causation emphatically with necessity and laws.

さて，アリストテレスは，『分析論後書』で，学問的知識（学知，ἐπιστήμη）が成立するための手続きとして，論証（ἀπόδειξις）を問題にするとき，「論証知ἀποδεικτικὴ ἐπιστήμη に即した知の対象 τὸ ἐπιστητόν は，必然的なものἀναγκαῖον であることになろう」(73a22-23)と言う。アリストテレスは，この世界のプラーグマ（πρᾶγμα，事象）を問題として，このプラーグマの中に必然性を見い出そうとする。「ソフィストのような付帯的な仕方ではなくて，我々がそれぞれの事象（プラーグマ）を端的に知っていると思うのは，そのプラーグマが，それの故に在るところの根拠を，そのプラーグマの根拠であると知り，かつまた，そのプラーグマが他の仕方では在り得ないと知っていると思うときである」(71b9-12)ということから，第一に，プラーグマの根拠であるものを，そのプラーグマの根拠であると知ること，第二に，そのプラーグマが，他の仕方では在り得ないという意味で必然的であることを知ることが，学知が成立するための要件であることが読み取れる。そして，この学知を成立させる手続きとしての論証は，それをもつことによって学知が成立する推論（συλλογισμός）であり(71b18-19)，先に指摘した二点に対応して，「理由の推論 (συλλογισμὸς τοῦ διότι)」(78b3)，「必然的な原理（すなわち，前提命題）からの推論 (συλλογισμὸς ἐξ ἀναγκαίων)」(73a24, 74b5)とも言われる。「理由の推論」というのは，「理由を知るということは，根拠を通じて知ることである」(75a35)と言われていることから，何故そのプラーグマが在るのかを根拠を通じて知る推論である。他方，「必然的な原理（前提命題）からの推論」というのは，「真の，第一の，無中項の，結論よりもよく知られ，結論よりも前の，結論の根拠である」(71b20-22)ところの論証の原理，すなわち，前提命題に基づいて行なわれる推論である。以上のことから，『分析論後書』で問題とされている「必然性」は，何よりもまず，プラーグマについて言われた必然性であると言えるだろう。このプラーグマについて言われる必然性は，事柄自体の必然性を意味している。それは，前提命題について当てはまるのと同様に，結論命題についても当てはまる。しかし，同時に，『分析論前書』で言及された「必然的に帰結する」という場合の，推論の必然性も，それが妥当な推論である限りは，やはり，あると考えるべきであろう。これに関しては，例えば，トマスが，『分析論後書註解』[4] において区別している二種類の必然性，すなわち，「継起(推論)の必然性(necessitas consequentiae)」が後者に相当し，「結論の端的な必然性(necessitas absoluta consequentiae)」が前者に相当する。ここで，少なくとも，前述のアリストテレスのテクストからは，プラーグマ（事柄）自体の必然性と推論の必然性とが問題となっていることは確認できると言えるけれども，プラーグマの必然性にせよ，推論の必然性にせよ，それらが，学知をもつことになる人間の精神の側に，根拠をもつという観点は見て取ることはできないであろう。

2．テクスト解釈上の問題

アリストテレスの用いる表現の中で，「必然的に帰結する」ἐξ ἀνάγκης συμβαίνει (Arist. *A.Pr.*,

[3] Sorabji, Necessitation and Law in Ancient Accounts, p.69.

[4] Thomas, *In Aristotelis Libros Posteriorum Analyticorum Expositio*, p.195, n.124.

24b19-20)という場合と「必然的な原理（すなわち，前提命題）からの推論 (συλλογισμὸς ἐξ ἀναγκαίων)」(73a24, 74b5)という場合は，差し当たり，それぞれ，前者を「推論の必然性」，後者を「前提命題の必然性」と，理解することができるであろう。しかし，『分析論後書』において，論証と必然性の関係について，写本の読み方が難しい箇所(74b13-14)があり，その読み方は，必然性をどのように理解するかという点にかかっている。それは，ロスの校定では，ἡ ἀπόδειξις ἀναγκαίων ἐστίとなっており，「論証は必然的な事柄を対象とする」と読めるが，このすぐ前後の箇所では，ἡ ἀπόδειξις ἐξ ἀναγκαίων(74b18)，すなわち，「必然的（な前提命題）に基づく論証」と言われており，これは，明らかに，「前提命題の必然性」を意味しているけれども，問題の箇所は，「前提命題の必然性」だけを意味しているのか，それとも「推論の必然性」をも意味しているのか，必ずしも明らかではない。これに関して，デッテルは次のように述べている[5]。

> Es scheint schwierig, in 74b14 das handschriftliche ἀναγκαῖον zu halten. Sachlich ist es problematisch, die Demstration insgesamt , notwendig' zu nenne, und sprachlich wäre ἀναγκαῖόν τι zu erwarten. Mures Konjektur ἀναγκαίου ist dem Vorslag ἀναγκαίων vorzuziehen, weil Aristoteles gewöhnlich auf demonstrative Konklusionen mit Ausdrücken im Singular verweist.

写本のまま，ἀναγκαῖονと読むことは困難であるとしても，ロスのように，ἀναγκαίωνとすれば，意味は明確になるが，そのことによって，「必然性」の意味が，「前提命題」だけに限られる。それに対して，写本の通り，ἀναγκαῖαとするか，または，ἀναγκαῖόν τιとすることによって，「論証は必然的なものである」あるいは「論証は何か必然的なものである」と読むことが可能である。この読み方によって，前提命題の必然性だけでなく，論証を構成する推論の必然性を意味していると解することができるのではないか。逆に，アリストテレスは，前提命題の必然性を明示するためには，「必然的な前提命題に基づく」ἐξ ἀναγκαίων ἀρχῶνという表現を用いていることを考え合わせると，意図的に，この表現を用いず，ἀναγκαῖονと言ったと考えられるであろう。しかし，アリストテレスにおける推論の必然性に関して，何をもって必然的とするか，解釈者が前提している必然性の内実によって，テクストに読み方が変ってくることは否めない。そういう意味で，この箇所は，正確に読むことが困難な箇所であると言えよう。

3．必然性をめぐる諸解釈

『分析論後書』における推論あるいは論証の必然性をめぐっては，前述の人間の精神の側にある思考の法則としての必然性以外の必然性，すなわち，大きく分けて，プラーグマ（事柄）自体の必然性と，推論の必然性，そして，これら両者を意味する必然性があるように思われる。事実，これらのいずれかに相当する必然性が，アリストテレス以降の解釈者たちによって，言及されてきた。まず，論証がそこから成立するために，あらかじめ（前もって）もっていなければならない知識に関して，それがどのような知識であるかを，サン・トマのヨアンネスは，次のように述べている[6]。

> Quod enim aliquid necessario praecognoscendum seu praesupponendum sit oritur ex illo principio, quod non potest dari processus in infinitum neque circulus in demonstrationibus.

ここでは，前もって何らかの事柄が必然的に知られていなければならない，とされる。このことは，アリストテレスのテクストに従えば，プラーグマ（事柄）自体の必然性というよりは，前もって何らかの事柄を知っている必要性と理解するべきかもしれない。また，グロステストは，『分析論後書註解』において，次のように述べている[7]。

> Omnis demonstratio est sillogismus ex necessariis, omnia et sola per se inherentia sunt necessaria, ergo omnis demonstratio est sillogismus ex per se inherentibus.

ここでは，推論がそれに基づく前提命題の必然

[5] Detel, 2 Bd., Spezielle Anmerkungen, S.154.

[6] Ioannes a Sancto Thoma, Log.II, P. Q. XXIV, Art.I, p.754.

[7] Robertus Grosseteste, *In Posteriorum*, I, 6, p.129.

性を，アリストテレスが言及する自体性とともに問題としている。しかし，グロステストは，同時に，推論の必然性をも念頭に置いていたことが，次の註解の箇所から知ることができるであろう[8]。

> Et quia in littera Aristotelis nondum factus est sillogismus nisi affirmativis in secunda figura, ut perficiat necessitatem illius sillogismi addit minori propositioni hoc, scilicet, quod sola ea que per se sunt necessaria sunt, dicens: omne enim aut sic est, id est, aut per se est, aut secundum accidens, et accidentia non necessaria sunt.

第二格の推論について言及しながら，はっきりと，「推論の必然性」と言っている。このことは，アリストテレスが，「必然的に帰結する」ἐξ ἀνάγκης συμβαίνει (Arist. *A.Pr.*, 24b19-20)という場合の推論の必然性に対応するものと考えられる。ところで，アリストテレスが，『分析論後書』で，推論の結論の根拠であり，同時に，論証の手続きの出発点としているのは，「普遍」καθόλουであるが，この普遍は，論証の前提命題において，把握されていなければならないとされる。これに関しては，具体的には，論証を構成する前提命題が備えているべき条件として，属性（述語）が主語に，

(1) κατὰ παντός（すべてについて）
(2) καθ' αὑτό （自体的に）
(3) καθόλου（全体に即して，普遍的に）

属すること(73a26-27)，をアリストテレスは挙げている。一般には，これらの条件は，(1)は「全称性」，(2)は「自体性」，(3)は「普遍性」という呼称を与えられる。ところが，これに関して，ザバレッラは，必然性と関連づけて，次のように述べている[9]。

> plures enim sunt necessitatis gradus, et aliud est magis necessarium, aliud minus: est enim necessaria propositio de omni, et adhuc magis necessaria conditio per se, sed maxime omnium praedicatio universalis.

これによると，必然性には段階があり，前述の論証を構成する前提命題が備えているべき条件に応じて，(1)全称命題，(2)自体性の条件，(3)普遍的な述語付けの順に，必然性が大きくなるように言われている。propositio, conditio, praedicatioと異なる名称で呼ばれているけれども，いずれも，推論の必然性というよりは，命題，それも，論証を構成する前提命題の必然性が問題とされていると考えてよいであろう。このことは，アリストテレスのテクストから直接言えることではないと思われるので，例えば，ニールたちが，次のように言っているのは，適切ではないと言わなければならない[10]。

> Zabarella does not profess to add anything here to Aristotle's doctorine, and he does not consider how we may acquire the major premiss for an argument from effect to cause.

では，推論の必然性については，どのように考えればよいのであろうか。アリストテレス自身の表現では，「必然的に帰結する」ἐξ ἀνάγκης συμβαίνει (Arist. *A.Pr.*, 24b19-20)ということになるが，これに言及した例として，件のニールらは，ボルツァーノを挙げている[11]。

> Perhaps Bolzano overlooks it because he wants to think of the relation consequences as holding always in virtue of a general rule. For he says in a note at the end of this section that when Aristotle uses the phrase συμβαίνειν ἐξ ἀνάγκης ('it follows of necessity') to describe the relation of the conclusion to the premisses in a valid syllogism, even though premisses and conclusion may be all alike false, he must surely mean that every argument of the form exemplified leads to a true conclusion if only the premisses are true.

ここでは，少し問題は複雑である。すなわち，前提命題が真である場合は，推論は，必然的に真なる結論命題を帰結するとしても，偽なる前提命題から，偽なる結論命題が導出される場合，やはり，その推論の過程は必然的であると言えるのか，という問題である。アリストテレスのテクストに即して考える限りは，前提命題が真である場合に，推論が，必然的に真なる結論命

[8] Robertus Grosseteste, *In Posteriorum*, I, 6, pp.129-130.
[9] Zabarella, *In Lib. Poster. Analyt. Commentarij*, 712B-C.
[10] Kneale and Kneale, p.307.
[11] Kneale and Kneale, pp.368-369.
Bolzano, *Wissenschaftslehre*, 2Bd., §154, Anm.1.

題を帰結することについては，推論の必然性を認めることができるであろうが，偽なる前提命題から推論する場合は，推論の過程が妥当であれば，結論命題は偽となることが必然的であるとは言えるが，このことを推論の必然性と言うかどうかは問題である。偽なる前提命題から推論する場合は，また，妥当でない推論によって，結論命題が真であることがあり得るけれども，それは，偶然に，付帯的に真であるにすぎないと言うべきであろう。この点は，ニールらも指摘する通りであろう[12]。

The fact that the relation which he calls *Ableitbarkeit* (and we shall call that of being a consequence) may hold between false propositions distinguishes it, according to Bolzano, from the relation of having something as ground, since tha latter can hold only between truths.

ボルツァーノが，アリストテレスの『分析論前書』と『トピカ』の推論の定義をギリシア語のまま，引用して取り上げているのは，推論による結論命題の「導出可能性 *(Ableitbarkeit)*」を問題としているからであり，セベスティクによれば，ライプニッツが言う（推論の）形式formaがそのような力visをもっていると考えることによるという[13]。

Mihi vero omnis rationatio quae vi formae concludit, hoc est quae semper successura esse, substitutis in praesentis exempli locum exemplis aliis quibusque, rectam formam habere videtur.

ライプニッツの言うrationatioは，ここでは，推論と考えられるが，formaが，推論の形式であるとするのは，ひとつの解釈であり，その可能性はあるけれども，その推論が対象としている事柄自体，アリストテレスの言葉で言えば，プラーグマの形式であると見る可能性もないわけではない。しかし，ボルツァーノが，問題としていた偽なる前提命題に基づく推論についても，それが偽であれ，結論命題の「導出可能性」の根拠を，ここに求めるとすれば，内容を捨象した推論の形式としてのformaにその根拠を求めるのは可能であろう。さて，ボルツァーノの問題意識が，我々にとって意味があるのは，真なる前提に基づく妥当な推論の手続きによって導出された真なる結論命題を帰結とする妥当な推論，すなわち，論証ではなくて，前提命題が真であることが保証されていない場合でも，それらを前提として，妥当な推論，すなわち，推論の必然性をたもって，何らかの結論命題を導出した場合，その手続きによって得られた知見は，学知と同等でないにしても，何らかの学的知識として価値があるのかどうか，また，あるとすれば，それは何に基づくのか，という問題を考察することに通じることにある。具体的には，問答法的推論(διαλεκτική)とアポリアー(ἀπορία)の方法がこれにあたる。

4．アポリアーの方法の素描

アリストテレスは，多くの箇所で，解釈者たちによって，問答法的推論であるとか，アポリアーの方法を用いていると評されるが，アリストテレス自身が，アポリアーの方法を主題として述べているのは，『形而上学』B巻である。そこで実際に採用されている方法が如何なるものであるのかは，様々に問題にされてきたが，その中でも古典的な解釈として，ロスのものを挙げることができる[14]。

ロスによれば，アリストテレスの用いている方法には，主に次の三つの特徴がある。

(1)「アリストテレスは，他の幾つかの著作においてもそうであるように，先行する思想史によって論述を始め，その中で如何にして四原因が順次認識されてきたかを示している。」

(2)「アリストテレスの方法は，アポレマティック(aporematic)である。アリストテレスが言うには，主題となる事柄のもつ諸困難についての明瞭な見通しから，論述を始めること，そして，主要な問の各々について，賛成の側と反対の側とについて偏らない考察を以って論述を始めることが肝要である。」

(3)「採用されている方法は，大部分，既知の諸前提から，それらの前提が齎す或る結論へという形式的な三段論法の議論という方法ではない。数学における公理のような根本的真理については，証明をしようと試みるのではなく，それら

[12] Kneale and Kneale, p.369.

[13] Leibniz, *Opusc.*, pp.338-9. Sebestik, p.240.

[14] Ross, Vol.1, pp.lxxvi-lxxvii.

の真理性を否定することによって生じるつじつまの合わない帰結を示すことによって，それを認めさせることである。」

これら3点のうち，(1)は，アリストテレスが自らに先行する人々乃至同時代の人々の学説を述べている箇所に対する評価の問題である。ロスは，少なくとも，四原因論については，アリストテレスが学説史を展開するのは自説の再確認のためであって，四原因論そのものの探究のためではない，と理解している。逆に，(2)は，探究の手続きとしてのアポリアー（難問）の取り扱いの問題である。或る事柄を廻ってどのような困難があるのかを予め列挙しておき，それにあらゆる角度から考察を加えるというこの手続きは，このままではいわゆる体系的な学説の提示にはならず，却って，難問の解決を求めて試行錯誤する精神の様を我々に提示しているのである。これを指して，ロスは，「アポレマティック」と形容する。更に，(3)は，哲学がその考察の対象としている公理や「思考の法則」（アリストテレスのテクストでは，矛盾律や排中律）は帰謬法で示されること，つまり，既知の諸前提から，それらの前提が齎す或る結論へという形式的な三段論法で示されるのはないことを指摘している。これは具体的には，『形而上学』Γ巻の記述を指している。

以上の三点のうち，(1)の学説史の評価については，問題が残るが，ロスの記述自体が，極めて概括的なものであり，細かい論点を別にすれば承認し得るものである。(2)のアポレマティックな方法と(3)の帰謬法による手続きは，「哲学」の取り扱う対象が，既に確立された何らかの原理として我々の手にないという状況から必然的に採らざるを得ない手続きである。(3)の帰謬法の使用については，なるほど，ディアレクティケーとの形式上の類似性を見い出すことはできる。つまり，相手の主張をそれとして受け入れ，そこから帰結する事柄が，不合理なものとなるように推論すれば，ちょうど前提とされた ἔνδοξονから，ἄδοξονが帰結した場合と同じになるからである。けれども，アリストテレスの正式の見解としては，いわゆる帰謬法とディアレクティケーの方法とは異なるという点が，従来，見落とされてきたように思われる。

さて，次に，(2)のアポリアーの取り扱いに関しては，アリストテレスのアポリアーの取り扱い方に着目して，これを『形而上学』の方法論的特色として，理論化しようとする試みがL・ルガリーニによってなされている[15]。

ルガリーニは，「アポレティカ」「ディアポレティカ」という呼称を用いて，アリストテレスの『形而上学』における方法を特徴付けようとする。これは，彼独特の呼称[16]であるから，我々はこれらの呼称そのものにとらわれず，その内容を確認しておかなければならない。ルガリーニは，「哲学の方法の確立におけるアポレティカが予備的な契機をもつことが，アリストテレスによって，特に『形而上学』第3巻冒頭に指摘されている」と言う。『形而上学』B巻は，アポリアーの列挙に充てられているが，B巻冒頭の箇所(*Metaph*.B,c.1,995a24-b4)で，アポリアーを列挙する動機を明らかにすることに注意が払われている。ルガリーニは，まず，この箇所に基づいて所説を展開している。

それによれば，アリストテレスは，必要不可欠な探究の方法を次の三つの段階に区別して提示しているという。「即ち，第一に，ἀπορῆσαι とは，アポリアーを明るみに出すことであって，第二に，διαπορῆσαι καλῶς とは，そのアポリアーがもつ様々な観点から，それらを然るべく解きほぐすこと，そして第三に，εὐπορῆσαι とは，アポリアーの解決に進むことである」[17]。そして，これらの三つの契機は，手続きとして一つのまとまりをなしているので，この手続きを「我々は，＜ディアポレティカ＞という簡略な表現で呼んで，間違いないであろう」と言う[18]。　アリストテレスは，ここで，探究の道はその出発点を行き詰まり（即ち，「道がない」という意

[15] Lugarini, pp.131-156.

[16] 「アポレティ aporetica」及び「ディアポレティカ diaporetica」という呼称は，ἀπορῆσαι 及び διαπορῆσαι の形容詞形から採った造語であって，実際，ルガリーニ自身，「アポリアーの段階grado aporetico」とか「ディアポレティカ的手続き procedimento diaporetico」というように形容詞としても用いている。

[17] Lugarini, p.143.

[18] op.cit.p.144

法で，アポリアー）の状態[19]に見い出し，自らの目的を見失わずにそこから外へ出ることであると理解しているのである。この場合，「道を見い出す」εὐπορῆσαιということのうちに，探究の解決に至る段階が示されているのであるが，「アポリアー」という言葉の使い方からして，哲学するということは，いわば「歩む」ということとして理解されているとい言ってもよいであろう。より適切には，「巧く」歩む，ということとして。また，このことをアリストテレスがキーポントとなる「歩み」ということのうちに示していることは，逆にアポレティカ的（道がなく，行き詰まった）状況に探究の出発点を置いたということから帰結するとも考えられる。ルガリーニは，この箇所でのアリストテレスの意図は，εὐπορῆσαιということが，διαπορῆσαι καλῶς（うるわしく）ということを必要とし，このこと（つまり，διαπορῆσαι καλῶς）は，更に，ἀπορῆσαιということを必要とするということをはっきり示すことにある，と看做している。即ち，この過程の第三の契機は，第二の契機を必要とし，第二の契機は考察の中でも中心的な動機を与える第一の契機を含意するというのである。このことを彼は，次のようにまとめている[20]。

甲「εὐπορῆσαιということは，予め明るみに出されたアポリアーを解き放つことであり，そのアポリアーを知らなければ，結び目を解き放つことはできない。他方，取り扱われている事柄に関係する結び目が存在するということは，精神の働きが中断されるということによって，明らかになるのである。」

乙「まず，アポリアーを通過することなしに探究にはいる人々は，(a)何処へ向かっているのか知らない者に似ており，(b)探究においてそれへ向かって歩んできた当のものが発見されたときに，彼らにとっては目的が明らかではないので，発見したのか否か，分からないのである。それに反して，目的は，前以てアポリアーを凝視しておいた者にとっては明らかなのである。」

丙「様々な観点においてアポリアーを展開しておくことは，それを解決するにあたって，条件をよりよいものにする。それはちょうど，争議において判決を下すことが問題になっているときのように，である。」

更に，ルガリーニによれば，これらを合わせて吟味してみると，始めの二つの考察が，まとめて次の帰結へと流れ込んでいるという。即ち，εὐπορῆσαιということは，前以て見ておかれたアポリアーを解くことに一致して起る（甲）。更に，そのアポリアーの解決が探究の目的をなしている（乙）。ここからして，εὐπορῆσαιは，比喩的な表現で言われる解決なのであり，これはちょうど，アポリアーの状態にいるということが，やはり，比喩的な表現で言われていることに対応しているのである。つまり，「よき歩み」を歩み通すこととアポリアーを解くこととは，アリストテレスにとっては同時に起るのである[21]。

なるほど，この箇所では，「歩み」という一種の比喩的な仕方によって，探究の過程が表現されているのは確かであるが，そのことよりも，我々の注意を引くのは，アリストテレスのテクストで言えば，995b2-4であり，ルガリーニのまとめ方によれば，先に言及した丙の内容である。これに関しては，ルガリーニは特に（少なくともこの箇所では）注記していないが，或る事柄を廻って何らかの問題が生じる場合，その問題に対して如何なる解答が可能なのかを考察するにあたり，アリストテレスは，他の（彼に先立つ人々や同時代の）人々がそれについて何かを述べている場合，その見解を取り上げているが[22]，そこに我々は，他人の見解をアリストテレスがどのように扱っているかを見ることができる。もっとも，既にロスが指摘していたように[23]，アリストテレス自身は意識していなくとも，先行する人々の思想からの影響を受けているのではあるが，同時に，彼独特の思考法・問題設定の故に，取り上げた他人の見解を部分的にしか把握していないこともあり得る。しかし，一

[19] ルガリーニの表現，aporetica。

[20] op.cit.p.144.

[21] op.cit.p.145.

[22] 『形而上学』Ｂ巻第２－６章。

[23] Ross, Vol.1, p.lxxvi.

旦取り上げた見解から，論理的に帰結し得る事柄を可能性をもつものとして追求することも行なっている。

さて，ルガリーニによれば，『形而上学』の方法としてアリストテレスが用いているのは，「ディアポレティカ」という方法であって，これは，

(1)ἀπορῆσαι（アポリアーの状態に至り，アポリアーを明るみにだすこと），

(2)διαπορῆσαι（そのアポリアーがもつ様々な観点から，それらを然るべく解きほぐすこと），

(3)εὐπορῆσαι（アポリアーの解決に進むこと）

という３つの契機からなる[24]，ということになる。そして，このアポリアーの内容乃至性格，即ち，「哲学」の対象の性格については，『形而上学』Ｂ巻第１章で，難問を列挙した後で，アリストテレスが，「これらすべての難問については，単にこれらから脱して真理の道に出ることが困難であるばかりでなく，これらを難問として議論（ロゴス）によって究明することさえ容易なことではない」(*Metaph.*B,c.1，996a15-17)ことから，「この吟味における手続きが，さきほど，選んだ簡潔な表現を用いるならば，ディアポレティカであり，この手続きは潜在的ではないものとして同意された「真理」に関して，そして，その真理の発見に関して機能する手続きという位置付けをされる。逆に，真理はそこに，同じこの手続きの対象がのようなものかを予示しているのである」[25]とルガリーニは述べている。

さて，以上のことをふまえて，推論一般と，推論の必然性と，アポリアーの方法の関係を考察することになるが，その際，事柄そのものがもつ必然性と，推論の必然性との関係が問題となるであろう。従来の研究では，前述のロス，ルガリーニをはじめ，クリアリィ[26]にしても，アポリアーの方法における何らかの推論と，その推論の必然性についての考察はなされていないからである。これを次なる課題の一つとしたい。

[24] Lugarini, p.143.

[25] op.cit.p.145.

[26] Cleary, 1995: *Aristotle and Mathematics.*

文献

Arnauld A. et P. Nicole, 1981: *La logique ou l'art de penser,* Paris: Vrin.

Bolzano, Bernard, 1837: *Wissenschaftslehre,* 4 Bde, Sulzbach.

Cleary, John, J., 1995: *Aristotle and Mathematics, Aporetic Method in Cosmology and Mathematics,* Leiden.

Detel, W., 1993: *Aristoteles Analytica Posteriora,* 2 Bde, Berlin.

Husserl, E., 1992: *Logische Untersuchungen,* Zweiter Bd., I Teil, Text nach *Husserliana* XIX/1, Hamburg.

Ioannes a Sancto Thoma, 1948: *Cursus Philosophicus Thomisticus,* Tomus I, Torino: Marietti.

Kneale W. and M.Kneale, 1962: *The Development of Logic,* Oxford.

Leibniz, 1903: *Opuscules et fragments inédits de Leibniz,* Ed. L. Couturat, Paris: Vrin.

Lugarini, L. 1972: *Aristotele e l'idea della filosofia,* Firenze.

Mill, J.S., 1950: *Philosophy of Scientific Method*(Abridged edition of *A Sytem of Logic,* 1843, London), New York.

Robertus Grosseteste, 1981: *Commentarius in Posteriorum Analyticorum Libros,* Firenze: Olschki.

Ross, W.D. 1924: *Aristotle's Metaphysics: A Revised Texts with Introduction and Commentary,* 2 Vols, Oxford.

Ross, W. D., 1949: *Aristotle's Prior and Posterior Analytics,* A Revised Text with Introduction and Commentary by W.D.Ross, Oxford.

Sebestik, J., 1992: *Logique et mathématique chez Bernard Bolzano,* Paris: Vrin.

Sorabji, R., 1980: *Necessity, Cause and Blame, Perspectives on Aristotle's Theory,* London.

Thomas Aquinas, 1964: *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio,* Torino: Marietti.

Zabarella, J., 1597[1966]: *Opera Logica,* hrsg. von W.Risse, Köln[Hildesheim]: Olms.

（あかい　きよあき，広島大学［哲学］）